

二〇二一年度 光塩女子学院中等科【第二回】

国語基礎入試問題

二〇二二年二月一日（月）実施

《注意事項》

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- ② 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
- ③ 解答は、解答用紙に書きなさい。
- ④ 記述問題の字数については、すべて句読点をふくみます。

□ 次の各設問に答えなさい。

(1) 次の各文の——部の読みをひらがなで書きなさい。

① 長編小説を読破する。

② 社会的な距離を保つ。

③ 現役を退く。

④ 百円均一の店で買う。

⑤ 衛生状態に気をつける。

(2) 次の各文の——部のカタカナを同訓・同音の漢字に書き分けなさい。

① 学業をオサめる。

② 国をオサめる。

③ 授業開始前に席にツく。

④ 図工の授業で手にのりがツく。

⑤ あのと二人は性格が対シヨウ的だ。

⑥ 小学生を対シヨウにした本を読む。

(3) 次の各文の内容と最も関係が深い言葉を下のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。(同じものを二度使うことはできません。)

① 運動が得意な光子さんは、体育の時間はいきいきとしている。

② この試合に敗れると、全国大会には出場できない。

③ おなががすいているのに、もらったのはあめ玉一つだ。

④ 委員長は会の規則についてすらすると説明した。

⑤ 塩子さんはいくら注意をされても全く気にしない。

ア 蛙かえるの面つらに水

イ 立て板に水

ウ 背水しんの陣

エ 水を得た魚のよう

オ 焼け石に水

(4) 次の()に最もよくあてはまる言葉を後のア～カから選び、それぞれ記号で答えなさい。(同じものを二度使うことはできません。)

① 冬休みによく勉強した。()、成績が上がった。

② 秋の夜には色々な虫の声が聞こえる。()、リーンというのはスズムシの声だ。

③ 暦こよみの上では春だ。()、寒さが厳しい。

④ 教室で発言する人は少ない。()、オンライン授業の方がたくさんの人が意見を出す。

⑤ 発表はきつとうまくいくだろう。()、たくさん練習したからだ。

ア しかし イ だから ウ それとも エ 例えば
オ なぜなら カ むしろ

(5) 次の〈書き出しの文〉と〈結びの文〉との間にあるア～エの文を並べかえたとき、意味の通る順になるものを1～4から選び、番号で答えなさい。

〈書き出しの文〉我々は顔を知らずに他の人とき合うことができる。

ア 多くの場合には言語に表現せられた相手の態度から、あるいは文字における表情から、無意識的に相手の顔が想像せられる。

イ 手紙、伝言等の言語的表現がその媒介※はいかいをしてくれる。

媒介※はいかい：間に立つて取りもつこと。

ウ それは通例きわめて漠然ぼくぜんとしたものであるが、それでも直接ちやくせつ逢った時に予期との合不合をはっきり感じさせるほどの力強いものである。

エ しかしその場合にはただ相手の顔を知らないだけであって、相手に顔がないと思っっているのではない。

〈結びの文〉※いわんや顔を知り合っている相手の場合には、顔なしにその人を思い浮かべることは決してできるものでない。

いわんや：言うまでもなく。

1 ア↓イ↓エ↓ウ 2 ア↓ウ↓イ↓エ 3 イ↓エ↓ア↓ウ 4 エ↓ア↓ウ↓イ

〔二〕次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（筆者はゴリラの研究者です。）

ぼくたち人間は、進化の過程で言葉を得たことで、距離を保ってつながれるようになるとともに、身体を使わず、時間と空間を超え、いろいろな人とつながることができるようになりました。

言葉はポータブルなものです。重さがないので、どこにでも持ち運びができる。言葉を使うことで、過去に起こったことを、まるで目の前で起こっているかのように解説することができるし、目の前で起きていることを、別の場所、もしくは今ではない時間に再現することもできます。自分が行ったことのない場所で起こったことを、あたかも行ったかのように再現して伝えることもできます。言葉を得た人間はフィクションを生み出しました。死を考えられるようになったのも言葉を得たためです。死者と対話できるという幻想も生まれました。（中略）

一方、言葉をもたない動物は、その場で瞬時に直観で対峙し、解決します。それ以外のオプションをもちません。人間も本来、同じ能力をもっていたはずですが、言葉の力が大きくなるにつれ、その力が減退しました。たとえば、その場はやり過ぎして、あとで考えるとといった状況では、言葉が力をもちます。あのときあの人はこう言ったけど、本当はどうだったのだろう、こんな情報を流しているけど、裏では何を考えているのか、ひょっとしたらとんでもないことを目論んでいるのではないか、などと言葉にこだわってしまう。これは、言葉による幻想、フィクションに侵されている証拠です。フィクションが前面に出てくれば、動物のように生の感情のぶつかり合いを通じて瞬時に何らかの解決策を見出す、という人間本来の能力が落ちていきます。

こうして今、人間の世界には、身体を通じたコミュニケーションをまったく無視した社会が出来上がっています。

人間は、言葉でルールをつくっています。（中略）「今日は朝礼があるから整列する」「教室に入ったら席につく」。こうした言葉による規則が先にあって、自分がしたいことより、その規則を守ることが先決になります。会社のルールや法律など、すべて言葉によるルールです。（中略）※この中略部で筆者はゴリラと身体を通じたコミュニケーションをとってきたことを紹介しています。）かつては、人間も、身体感覚でさまざまな問題を解決してきました。お互いの関係や環境は毎日変わります。こうすれば今日はこうなるということを直観で判断して互いの関係を調整していました。

ぼくが子どもの頃もそうでした。自然は日々変わるものだから、ぼくらも変わらざるを得ません。雨が降れば、太陽が出れば、遊ぶ場所も方法も変わります。その度に、友だちと顔を見合わせて、気持ちがつながっていることを確認しながら、互いの関係を調整していました。それは、ゴリラの社会にとっても近いものです。こういう子ども時代があったからこそ、ぼくは、言葉では理解

できないゴリラの群れに入ることができたのかもしれませんが。ゴリラの場合は、人間と表現の方法が近いから、余計わかりやすかったのです。

ところが、今の人間社会は、不変のルールに従うことが日常生活になっています。①が先行しているから、②が感じていることより①を信じる。ルールが合わなくなったときにすぐに調整することができないために無理が生じます。

科学技術には良い面もあれば悪い面もあります。最初は良い面に注目が集まりますが、ある域を超えると今度はネガティブな面が強調されていきます。ダイナマイトを考えてもそうでしょう。最初は人間の力が及ばない物を壊すために非常に役立ったのに、それがやがて社会を破壊する戦争の道具に使われるようになりました。③言葉も同じです。

言葉は、人間が手にした技術の中で最初にして最大のものといってよいと思います。人間の認知能力は、言葉の発明によって一度つくり変えられました。これが、「認知革命」と呼ばれるものです。かつて言葉は人々の間のトラブルを調整するための交渉にも使われていたはずだし、集団間の暴力を鎮めるためにも使われていたでしょう。だから人間は集団を大きくすることができました。国家という巨大な組織をつくることもできたのも、言葉によってバーチャルな世界をつくり、その物語を共有してみんながまとまれるようになったからです。ダイナマイトと同様、最初は言葉もよい作用をもたらしました。しかし、やがてその言葉が、暴力をつくり出すために使われるようになります、だんだん人間にとってネガティブな作用をし始めます。

言葉を発達させるうちに、文字も生まれました。最初は、石や木に書いていた文字を、紙に書くようになり、やがてそれを印刷するようになる。さらに技術が進み、テレックスができ、ファクスが生まれ、そして今、ぼくたちはインターネットを通じて電子文字でつながるようになりました。

そもそも文字を介した理解には、常に疑いがつきまといまいます。会って話していれば、発せられた言葉だけの意味ではなく、相手の顔の表情や仕草、声色から裏の意味や背景を同時に感じることが出来ます。相手の言葉を聞きながら、「おそろく嘘を言っている」とか「本気みたいだな」と思ったりするのは、人間は言葉を話しているとき、無意識のうちに感情を出すものであり、同時に相手の感情を読みとる能力をもっているからです。話し手は、相手の解釈が間違っていると感じたら訂正することができます。本来、言葉の役割が発揮される場所は、こうしたやり取りが可能な場面でした。

しかし、文字は読み手本位のコミュニケーションツールであって、対話ではありません。書いた人はその場にいないので、読み手の勝手な解釈が許されます。読み手本位であるために、ときに誤解を生んで書き手が思ってもいなかった結論になったりします。

再現する過程で誤解が生じるのは当たり前で、それを避けることはできないのです。

④ラインなどのSNSがあたかも対話しているかのような使われ方をしていますが、それは、あくまでシンボルを使った文字世界の延長です。ラインを利用して人の中には、すぐに返事が来るから対話と同じような信頼関係をつくれていると反論する人もいるかもしれませんが、その論理には二重の意味で誤解があります。

一つは、言葉は抽象化されたものだということ。誰かと話をしていても、それは出来事すべてを表しているわけではなく、出来事をいったん言葉という抽象的なシンボルに集約してそれを再現しているだけのものです。実際には、言葉だけで相手の感情はわかりません。

もう一つは、文字化したり、肉声ではないものに変換してしまった場合、そこにさらに時間的な要素が加わるということです。言葉話すということは本来、瞬間の作業でもあります。対話を書き言葉にすると、Aさん「:」、Bさん「:」というように、時系列に並べられることになりますが、実際は、相手が話しているとき、相手の言葉を聴きながら、自分が次に話すことを考えている。それは書き言葉では表現できません。文字は、相手の言葉を受けて考えた結果出てくるものではあるけれど、その瞬間に自分の胸の中に生じた感情とは違うものです。書き文字の行間を読みとることはできても、実際に言葉を肉声をもって交わし合っている状況とは違うのです。そこにも齟齬が生じます。

ぼくたちは、誰かに会いに行くときには、服装や身だしなみを考えますね。相手によっては⑤語も使う。そういうときの緊張感、身体からほとぼり出るものです。ところが、スマホで言葉を文字でやり取りするだけなら、礼儀も⑤語もそれほど気にしなくてもいい。だから相手によって変えることをしなくなります。相手が不特定多数であれば、ますます身構えがなくなっていくます。

さらに、顔も知らない相手から得た情報に対しては、勝手に想像ができる分、実際に会ったときに、文字の情報に裏切られるかもしれないし、それがコミュニケーションの足かせになるかもしれません。だから行き違いも起こるし、それがときに犯罪に結びつくこともある。言葉はもともと緩衝材の役割を果たしていましたが、今は文字に引きずられて、行動を誘発している。(中略)言葉を生み出し、文字を発明し、今、インターネットの世界を介して言葉をやり取りしているぼくたちは、こうした言葉の負の面にもあらためて目を向ける必要があるのではないのでしょうか。

(山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち 野生に学ぶ「未知の時代」の生き方』による)

※注 ポータブル：持ち運びができる。 フィクション：作者の想像力によって書かれた物語。 対峙：向き合って立つこと。

オプション：選択肢。 ネガティブ：否定的な様子。 トラブル：もめごと。 バーチャル：実際の物やすがたとみなわないようす。

テレックス：電信により記録通信を行う方法。 ツール：道具。 ラインなどのSNS：SNSはソーシャルネットワーキングサービスの略で、イ

ンターネットを活用して交流するサービスのこと。ラインはその一つ。 シンボル：象徴。形のないものをたとえて表すこと。 齟齬：くいちがい。 足かせ：行動のじやまになるもの。 緩衝材：対立するものの間にあって、その衝突をやわらげるもの。 誘発：さそいおこすこと。

問一 空欄①・②には「身体」・「言葉」のどちらが入りますか。ふさわしい方をそれぞれ答えなさい。

問二 ——— ③「言葉も同じです」の説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 言葉もダイナマイトと同じように、必ず暴力をつくり出すものである。

イ 言葉も科学技術と同じように、良い面がある一方でネガティブな面もある。

ウ 言葉もダイナマイトと同様、戦争の道具として使われると危険である。

エ 言葉の発明も科学技術と同様、人間の能力をつくり替えるものである。

問三 ——— ④「ラインなどのSNSがあたかも対話しているかのような使われ方をしています」に関連して、ラインなどのSNS

と対話の違いについて説明した次の文章を読み、空欄にふさわしい言葉を本文中から抜き出して答えなさい。アは十字、イ～エは漢字二字で答えること。

対話なら、発せられた言葉の文字通りの意味以外にも、相手のアから、表にはあらわれ出ない意味やその言葉の背景を同時に感じるができる。また、話し手は相手の解釈が間違っていると感じたならその場で訂正することもできる。しかし、文字世界の延長であるラインにおいて、抽象化された言葉だけでは出来事すべてを表すことはできず、相手のイは明らかではない。また、文字は相手の言葉を受けて考えた結果出てくるものではあるが、それにはウがかかるので、言葉を受けた瞬間に自分の胸の中に生じたイとは違うものになっている。だから、筆者はラインなどのSNSでは対話と同じようにエ関係を作るわけではないと考えている。

問四 空欄⑤にふさわしい漢字一字を答えなさい。

問五 この文章を読んだ人の発言を次に記します。ア～カの中で、誤った内容を含むものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 言葉を発明したことによって、人間は過ぎてしまった出来事について、後から考えたり、その場にいなかった他の人に伝えたりすることができるとするのですね。

イ 人間は言葉を発明したことで、他の動物とは違い、生の感情のぶつかり合いを通じて瞬時に何らかの解決策を見出す能力を持つことがなかったのですね。

ウ 日々の天候に合わせながら遊び方を変え、友だちと顔を見合わせながら互いの関係を調整していた子どもの頃のやりとりを、筆者はゴリラの社会に近いものだと考えています。

エ 言葉は人々の間のトラブルを調整し、暴力を鎮めるために使われてきたのであり、本来、言葉の役割が発揮されるのは文字を介したやり取りだと筆者は考えています。

オ 文字は読み手本位のコミュニケーションツールで勝手な解釈も許されており、書き手の意図しない誤解が生じるのは当たり前であると筆者は考えています。

カ SNSでの言葉のやり取りは、すぐに相手から返事が来るとしても、実際に会って肉声で言葉をやり取りする対話とは異なるものだと筆者は考えています。

問六 この文章は『スマホを捨てたい子どもたち 野生に学ぶ「未知の時代」の生き方』という本の第三章の一部です。次の空欄にふさわしい二字の言葉を文中から抜き出して答え、第三章のタイトルを完成させなさい。

は人間に何をもたらしたのか——ゴリラから見た人間社会